

第 62 回日本医学検査学会

多田 達史*

第 62 回日本医学検査学会が平成 25 年 5 月 17 日(金)~19 日(日)の 3 日間、学会長：野村 努氏(香川大学医学部附属病院検査部)のもと、サンポートホール高松、JR ホテルクレメント高松、アルファあなぶきホールおよび高松市総合体育館(展示会場)にて開催されました。日本医学検査学会は日本臨床衛生検査技師会が主催し、毎年各都道府県持ち回りで行われています。私は実行委員長として学会の企画・運営を担当し、今回初となる抄録集の電子書籍化にも取り組みました。学術

集会のテーマを「健康への道標(みちしるべ)」~予防医学における臨床検査技師の役割~とし、一般演題は 608 演題、学会参加人数は約 3,200 名、企業関係者を含めると約 4,000 名の参加者があり、最後まで盛り上がった学会となりました。

内容としては、17 日に血管無侵襲診断セミナー、認定臨床染色体遺伝子検査師、認定一般検査技師、認定微生物検査技師、認定血液検査技師、NST 専門療法士、糖尿病療養指導士、POC コーディネーター、健康食品管理士などの認定資格の



学会受付風景

*香川県立保健医療大学臨床検査学科 tada@chs.pref.kagawa.jp

申請・更新に有用なセミナーを行いました。18日、19日は特別講演、特別フォーラム、教育講演、シンポジウム、ワークショップ、パネルディレディスカッション、症例カンファレンス、市民公開講座、ハンズオンセミナー、国際交流フォーラム(日韓学生フォーラム)など、予防医学に関連する企画が行われました。特別講演としては「糖尿病と脂肪毒性」：村尾孝児教授(香川大学医学部先端医療・臨床検査医学講座 香川大学医学部附属病院糖尿病センター)、「ここまで来た iPS 細胞研究：全ての患者さんに実行できる再生医療への応用の鍵を握る臨床検査」：青井貴之教授(京都大学 iPS 細胞研究所基盤技術研究部門)にお話し頂きました。また、主な教育講演としては「子宮頸がんの予防から検診まで」：塩田敦子先生(香川県立保健医療大学)、「鉄代謝の基礎―鉄と健康の関わり」：高後 裕先生(旭川医科大学)、「ゲノム・遺伝子解析研究がもたらす革新」：徳永勝士先生(東京大学大学院)、「抗原特異的 IgE 抗体測定による食物アレルギー診断の進歩」：小俣貴嗣先生(国立病院機構相模原病院)、「近未来、なぜ臨床検査の多くが質量分析に」：升島 努先生(理化学研究所生命システム研究センター)、「臨床微生物検査の新たな潮流と感染制御への対応」：大楠清文先生(岐阜大学大学院医学系研究科)、「血管領域の予防医学」：松尾 汎先生(松尾クリニック)など、どれも非常に有意義なご講演を頂きました。さらに、本学会の特別企画として、「検査診断への展望」と題した R-CPC を行って頂きました。東京大学病院の横田浩充先生、南松山病院の正田孝明先生にナビゲーターをお願いし、自治医科大学名誉教授の櫻林郁之介先生に症例を提示していただき、検査分野別に選考した演者に解析および

判読をお願いしました。フロアーを交えた活発な討議が行われ、この企画は第 63 回医学検査学会でも続けられることになりました。18 日夜には懇親会がありました。参加者は約 500 名で、讃岐のカンカン石(サヌカイト)で作られた石琴の神秘的な演奏など、大いに盛り上がり、楽しいひとときを過ごして頂けたと思います。

一方、市民公開講座では、「糖」に関する企画をしました。香川は和三盆糖の発祥の地であり、近年注目されている希少糖研究発祥の地でもあります。また、最近の調査では香川県民の糖尿病受療率が全国 1 位であることから、希少糖研究、運動療法の話まで、県民の興味をひく内容にしました。さらに特別招聘講演として、ジャーナリストの鳥越俊太郎氏に「がんと共に生きる」―臨床検査の大切さ―と題した講演をして頂きました。1,000 人以上の来場者があり、盛況でありました。そして、最大規模の機器展示発表会も本学会の魅力です。今回は 81 社の出展があり、来場者は 1,700 名以上でした。最新技術を駆使した最新機器を体験できたのではないのでしょうか。

他にも、未病をテーマにしたセッション、日本検査医学会共催企画シンポジウム、臨床検査データの標準化と保健医療への貢献、乳腺非浸潤性乳管癌の発見と術前診断、POC の予防医学への貢献、認知症予防に期待される臨床検査技師、といったシンポジウムもあり、大変充実した学会を開催できたと思います。

第 63 回医学検査学会は平成 26 年 5 月 17 日(土)、18 日(日)に朱鷺メッセなどを会場にして新潟県で開催されます。教員、学生の皆さまの参加を期待しています。